

# 学級指導に生かす教育相談

カウンセラー研修員 高倉 昭彦<sup>1)</sup>

## はじめに

生徒指導担当教諭になって5年がたとうとしている。その間、多くの問題をもつ生徒たちといろいろなかかわりを持ったり、各種の研修会に参加し生徒とのかかわり方について学んだ。しかし、日々直面する問題の対応に追われ、「今、目の前にあることをどうするのか」ということに常に意識がいていたように思われる。

また、不登校の生徒に対しての対応もまだ暗中模索の状態である。そして常に神経を使い、悩むことは生徒や保護者に対してどのようにかかわっていけばよいかということである。

そのような中で、今年度川崎市総合教育センターで教育相談についての研修をする機会を与えていただいた。この機会に、今までの自分の生徒・保護者とのかかわり方を見直すきっかけにしていきたい。

## I 主題設定の理由

### 1 研究をするにあたって

最近の生徒たちは「人間関係をつくるのが下手になってきている」といわれている。そうした中で、個人個人の付き合い方や集団の中での付き合い方をどのようにすればよいのか悩み、苦しむ生徒は増えてきているように思われる。そして、その苦悩の結果として、不登校や暴力行為に走る原因やきっかけになることも多いのではないかとと思われる。

また、学校には「スクールカウンセラー」や「心の教室相談員」が配置されるようになってきており、このことは今まで教員が行ってきたこと以上に、「生徒一人ひとりの心へのかかわりを大切にする」ということを社会が求めていることの顕れなのだと思う。

そのような中で、学校では生徒とのかかわりにおいて、接触の機会が多いことや、生徒の意識からしても、ますます学級担任の役割が重要視されてきている。

本研究では、学校において学級担任が生徒相互の「人間関係づくり」をどのように支援していけばよいか、そして、学級の生徒とどのようにかかわっていけばよいのかということについて、教育相談という視点に焦点をあて、学級指導にどのように生かしていけるかということを考察してみることにした。

## 2 研究の方法

- (1) 受理会議に出席して、インテークの方法、必要とする資料の聴取方法や内容、問題（主訴）の内容別分類と対応の仕方、教育相談の進め方などについて学ぶ。
- (2) 事例会議に出席して、教育相談の技法や進め方について学ぶ。
- (3) 教育相談初級講座と教育相談実習講座に参加して教育相談・カウンセリングの意義や方法・技法について学ぶ。
- (4) 文献や資料を通して、教育相談や学校カウンセリングの意義や方法・技能などについて学ぶ。
- (5) 総合教育センターで相談ケースを受け持ち、実践を通して体験的に研修をする。

## II 研究の内容

### 1 受理会議・事例会議から

受理会議に参加して、不登校を主訴とする教育相談が多いのにいまさらながら驚かされる。そして、その一つの原因として教員の対応の悪さを訴えてくるケースも少なくない。そのようなときは教員の対応の悪さが話題になるものだと思っていたが、実際はインテークの報告から、主訴を様々な方向から考察し、検討し、今後の教育相談のよりよい方向を探っている。子どもの生育歴や家族関係、保護者との面談の中での内容やしぐさなどから子どもの問題を把握していき、参加している方々の豊富な経験や感性から出た意見を交換する中で今後の方向性を探っている。

事例会議では来談者の心の変容や気づきが生まれ、問題が徐々に解決していく姿を知ることができた。カウンセラーが来談者の気持ちに沿いながら一緒に考えていくということはどういうことなのかを知ることができた。

これらの会議に参加して、カウンセラーが来談者との信頼関係を作り上げながら様々な角度から一つの問題を共に考えることによって、来談者が焦らずに、自らの力で問題を解決していくエネルギーをもてるようになることの大切さを学んだ。

学校において、今まで不登校の生徒とのかかわりの中で、何とか登校できるようになって欲しいという気持ちから、登校できない理由は何なのか、というような原因を探り、それを何とか取り除くことに主眼を置いていたことが多いように思える。しかし、生徒の中に現状を乗り越えようとするエネルギーがわき起こってこないと登校するのは難しく、また、不登校になった原因を見つけ、取り除くことはそう簡単なことではないこと、不登校といっても一人ひとり皆違いがあるということも改めて確

<sup>1)</sup>川崎市立犬蔵中学校教諭（カウンセラー研修員）

認できた。

また、「不登校になったきっかけの一つに教員の対応の悪さがある。」と書いたが、その多くは教員の気持ちがあまく子どもに伝わらなかったことによる場合が多い。エネルギーのない状態の子どもほど、その対応には注意を払わなければならない。

## 2 各種研修講座から

教育相談について今までいくつかの研修会に参加し、学んだことはあったが、長期に渡って様々な内容や方法を研修したのは今回が初めてである。

教育相談研修コースには初級及び実習コースが開設されており、教育相談の基本的な考え方、グループワークトレーニング、ミニカウンセリング、箱庭、ロールプレイング等について学ぶことができた。

その中で、グループワークトレーニングではグループで課題解決を互いに協力しあいながら取り組んで行くのだが、実際に経験し、「ふりかえり」を行い、お互いの意見を尊重しあう素晴らしさを感じることができ、自分を知る機会ともなった。個々の生徒の自発性を高め、生徒同士の相互理解、生徒と教師の相互理解のためにはこのようなトレーニングは有効であると思った。

また、ロールプレイングやミニカウンセリングでは「相手の身になって感じること」「相手の気持ちに寄り添って聞くこと」が教育相談では重要であることを体験した。実際に、5分間のミニ・カウンセリングでは聴き手の相づちや言葉かけによって随分と話の内容の深まりに差が出る。共感する言葉を投げかけることによって、話し手はより深い内容を話し、話が発展していく様子がわかり、受容すること、傾聴すること、共感することの大切さが理解できた。しかし、言葉の意味や、体験的に理解しても、実際の相談の場面で実行することがいかに難しい事であるかも認識させられた。

話し手と聴き手の気持ちや感情が、言葉だけで伝えられるのではなく、相づちや表情、動作によっても相互に伝えられるものであること、そして、それらの方法やタイミングも大切なポイントであり、適切に行えるようになるためには相当の訓練や経験が必要であるということを実感した。

また、教育相談の研修講座では「相談相手を理解する」ということが一つのテーマとなっていると思うが、私にとって各種の講座が「自分をふりかえる・自分を知る」という上で大変よい機会となった。「自分を知った上で生徒を理解しようとする」ことは生徒と接する上で大切なことではないだろうか。そういう意味でも教育相談の研修を教員は受けて行く必要があるだろう。

## 3 実際の面接から

総合教育センターでは、11月下旬から子ども担当としてカウンセリングを行ってきた。相談のケースとしては、不登校の小学校2年生男子Aさんである。インテーク面接の時は私自身も緊張していたが、Aさんもかなり緊張していた。日頃、多くの子どもと接し、事前に親担当の方より、生育歴や家族関係を聞いていたが、実際にAさんとのインテークであんなに緊張するとは思わなかった。

人と人との出会いは、その関係ができてくるまでは緊張が伴うものであることは言うまでもないが、特に相談の場ではインテーク時にカウンセラーが来談者とどのように出会うかということは、後の相談のためにも重要になってくる。また、カウンセラーが緊張するより、来談者はもっと緊張しており、その気持ちを受け入れながらインテークをしていくことの難しさを体験できた。

インテークでは、はじめのうちは母親から離れることをいやがり、言葉も出さずただうなずき、一緒にプレーをするAさんが次第に笑顔を見せるようになり、小さいけれども「あっ」とか「えっ」といったような声を出し、それが次には「いいよ」とか「これもやっていい?」といったしっかりとした言葉になって返ってくる。帰る時には「バイバイ」と手を振ってくれる。そんなAさんを見てこちらもうれしくなり、「うまくつながりができた」ものだと思ってしまった。

ところが、次回から2回連続のキャンセルとなり、学校で行われる教育相談と総合教育センターで行われる教育相談の大きな違いにぶつかることとなった。それは、今まで自分が行ってきた学校での相談活動は、来談者と面識があることが多く、まったく相手を知らないということはない。また、次の相談のきっかけとしてこちらからアプローチしていくことも可能である。それは相談があまくいかなかった場合でも次回面接が可能であるということである。それに対し総合教育センターでの教育相談は互い見ず知らずの者から関係を作っていかなければならず、また、こちらに来所してもらわなければ相談活動をすることができない。つまり、来談者に相談する気持ちがなくなればそこで相談活動は終わりになってしまうということである。次はなくなってしまうのである。私はそこに総合教育センターでの教育相談の厳しさを感じた。

私は学校で行ってきた教育相談の時と同じような感覚でAさんとのプレーに臨んでいた事を深く反省した。それと同時に、研修講座で「安易に自分の範囲でものごとを決めていく」という傾向が自分にはあることを振り返ったにもかかわらず、「来談者の気持ちに寄り添う」という基本的なことを忘れ、自分本位の思い込みをしていたことも反省した。

2回のキャンセルの後、Aさんが来談してくれて2回目のプレイをすることが出来た。待合室にいるAさんを見た時は何とも言えない安堵と嬉しい気持ちになった。Aさんの気持ちに寄り添うことを念頭に置きプレイをしていった。

プレイを重ねるごとにAさんの動きも活発になり、今まで遠慮があったプレイも思いきりこちらにぶつかってくるようになったり、話す言葉も多くなった。次第に家族のことなど自分のことを話し始め、「おじさん、何処に住んでるの」「子供はいるの」等、こちらにも質問をしてくるようになってきた。また、母親から離れてプレイすることを嫌がっていたAさんが「お母さん、いつか来るねー」と言っ、元気にプレイルームに入っていく等、Aさんのエネルギーの高まりを感じた。その変化を嬉しく思う反面、会う度が変わっていくAさんにどう寄り添っていったらいいのか、自分のかかわり方はこれでよかったのか等迷い、不安になることがあった。しかし、その都度、指導主事や相談員の方に相談する中でアドバイスをいただき、勇気づけられ、次のプレイに臨むことができたように思う。

今まで、学校で生徒や保護者の相談に応じることは幾度もあった。友達関係の悩みだったり、勉強のことだったり、いろいろな相談に応じてきたが、「話を聴く」ということはしていたかもしれないが、話を聴いて最終的には「それではこうしてみようか」というような方針をすぐに出していたように思える。「何とか解決しなければいけない」といったことを強く意識するあまり、話の内容にばかり注意を払い、「相談者の気持ちに寄り添う」という基本的なことが出来ていなかったように思う。

私は中学生と接する機会が多く、Aさんは小学校低学年ではあるが相談の根っここの部分、「相談者の気持ちに寄り添い、一緒に考えていくこと」は同じであり、その大切さと難しさをAさんとのプレイを通して体験することができた。

### Ⅲ 研究の成果と今後の課題

一年間の研修を通してはっきりしてきたことは、教員はカウンセラーとは役割が違うということである。学校で教員・担任が個室という場所と一定の時間を確保し、一対一で相談をすることができることは希である。また、生徒の気持ちに寄り添いながら話を聴き、その気持ちを理解しながらも指導や助言をしなければならない場面もあり、生徒・保護者から早急に問題解決を望まれる場合もある。教育相談の様々な手法はそれ自体は生徒理解には有効であると思うが、それだけでは教員として不充分であると思う。「生徒の気持ちに寄り添う」こと、傾聴・受容・自己開示といった教育相談の目をもちながら、その場その場にあった生徒とのかかわり方をどうすればよいのかということ、教員は常に考えていくことが必要だと思う。つまり、教員・担任は普段から「生徒の気持ちにより添う」ということをいつも心がけながら、普段から進んで生徒・保護者と接する機会を多くもつことが大切だと思う。このことを、いつも自分自身が心がけ実践していくことが今後の課題だと思う。

#### おわりに

1年間のカウンセラー研修を終るにあたって、今まで自分の中で教育相談についてもやもやしていたものが少し晴れてきたような気がします。まだまだ研修を積み重ねなければ見えてこないことが多くあると思いますが、自分なりにこのセンターでの経験を生かし、今後の教育活動を行っていきたいと思っております。

最後になりましたが、研修の機会を与えていただいたことを感謝するとともに、ご指導いただいた室長・指導主事・相談員の方々及び勤務校の校長先生をはじめ諸先生方に心より感謝いたします。

#### 【参考文献】

内山喜久雄・山口正二

『実践 生徒指導・教育相談』

ナカニシヤ出版 1999年

松原 達哉 『カウンセリング入門』

ぎょうせい 1998年

青野 勇 『取り組もう学校教育相談』

教文研双社 1998年

#### 【指導助言者】

川崎市総合教育センター研修指導主事 鈴木 眞一

# 教員と生徒のふれあいを すすめる教育相談

カウンセラー研修員 長谷川 雅之<sup>1</sup>

## はじめに

生徒指導担当教諭として4年目が過ぎようとしている。その間、多くの問題に直面し対応してきた。特に最近の現実的な対応場面では、個別的な配慮が強く求められ、今までの指導方法では解決しない事例が多くなった。更に、保護者との対応でも私たちが当然理解されていると考えていることが、理解されていないこともあった。今回のカウンセラー研修を通して、数十回に及ぶ実技研修や講演を受講することによって教育相談における基本的な考え方や技法を学ぶことができた。また、実際に相談にかかわる方々と交流したり、不登校の子どもを担当することにより、多くの事例や相談場面での現実を知ることができた。

研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともに、今後の自分自身の教育活動を見直し、教員としての資質を高めたいと思う。

## I 主題設定の理由

最近の学校現場の問題点は、教員と生徒の信頼関係が希薄になっていることだと思う。対教師暴力や器物損壊などの増加は信頼関係の欠如から来る顕著な現象であろう。その背景には言うまでもなく職場の多忙化がある。教材研究をはじめ、学校行事、会議、研修など教師の放課後は忙しく、落ち着いて子どもたちと心をふれあう場面や時間も少ない。また、子ども同士の信頼関係も同じように希薄になってきている。「いじめ」や「不登校」が象徴するように、子どもたちの中には、神経をすり減らすようにして学校生活を送っている子どももいる。昔あった地域の広場と、その機能は失われ、今や子どもたちの友達づくりは学校が主な場所である。従って、心を育てる感動体験や遊びも、学校行事や部活動に期待されるところが大きい。

最近いろいろなところで「ふれあい教育」という言葉が見られるのも、誰もが人と人の信頼関係の希薄さを問題ととらえているからだろう。新たな教育課題が提示されつつある現在、学校行事を見直したり、職員の会議や研修を減らしたりすることは必要なことであるが、時間

のかかる作業である。そこで、意図的に教員と子どもたちおよび子どもたち同志の人間関係づくりをすすめるために、カウンセリングにおけるいろいろな考え方や技法を教育現場に生かす必要がある。

学校における人間関係づくりは、「いじめ」「不登校」「非行の低年齢化」などの今日的教育課題を解決するための重要な鍵である。このことから人間関係づくりに欠かせない教員と子どもとの「ふれあい」に焦点をあて、この研究主題を設定した。

## II 研究の内容

1. 受理会議や事例会議に参加して、相談における主訴についての考察や関わり方を学ぶ。
2. 実際に相談を担当し、実践を通して問題を抱える子どもたちとの人間関係づくりを学ぶ。
3. 教育相談初級講座・教育相談実習講座などに参加しカウンセリングの意義や技法を学ぶと共に、各種の文献や資料を通して教育相談についての研修を深める。
4. 学校で行われている教育活動のいくつかを、子どもとふれあう場を中心に人間関係づくりという視点から見直す。

## III 研究の成果と今後の課題

### 1. 受理会議・事例会議を通して

毎週水曜日の午前中に開かれる受理会議では心理相談員や指導主事の方々のきめ細かい報告が行われ、私も参加した。来談者の表情や態度、姿勢、服装などの非言語的なことをはじめ、生育歴や家族関係、家庭環境など学校では考えられないほどの多くの情報を室長・指導主事・心理相談員・精神科の医者で考察し、今後の相談を進めていく上での方針が慎重に検討される。一件の相談に一時間以上も話し合いが行われることも希ではない。そして、この1年間受理会議に参加して思うことは、相談件数が大変多いことと、相談内容の深刻さである。教員のたった一言が深く子どもの心を傷つけ、苦しめてしまっていることや、保護者の信頼を損ねている現実があることを知った。また、反対に「いじめ」や「不登校」の子どもに誠心誠意かわかり、努力している先生に救われている保護者や子どもがいることも知った。受理報告の中でしばしば来談者の言葉として報告される内容に、先生の対応に対する不満や学校に対しての批判がある。私は改めて、教員の担う仕事の責任の重さを深く感じずにはいられなかった。

事例会議では、実際に行われているカウンセラーとク

<sup>1</sup>川崎市立生田中学校教諭（カウンセラー研修員）

クライアントとの貴重な相談事例を学ぶことができた。教育相談の基本である受容・傾聴・共感的な態度で人間関係が築かれ、クライアントが精神的安定を取り戻していく。クライアントの考えや気持ちを尊重する姿勢には教育相談のあるべき姿を見せていただいた。また、スーパーバイザーの先生の指摘される的確な視点にはカウンセリングの難しさと継続的な経験の必要性を学んだ。

## 2. 教育相談に関する講座や研修 及び文献等を通して

総合教育センターの教育相談初級・教育相談実習の講座と各種の研修会に参加した。すべての講座や研修が、第一線で活躍されているカウンセラーや大学の先生方の指導で大変多くの事を学ばせていただいた。

私の期待は学校で利用できる具体的な方法にあったが、ほとんどの研修が学校で活用できる内容であり、実技中心であったので真剣に取り組むことができた。

その1つがミニカウンセリング演習やロールプレイの実習である。ミニカウンセリングでは教育相談の基本である傾聴について学ぶことができた。相手の考えや気持ちを正確に把握し、表面的な受け止めではなく、きちんと応答していくことがいかに難しいことかを知った。いままでも学校で子どもや保護者の相談を何度も受けてきたが、どちらかという話し手の話をじっくり聴くというよりはむしろ、相手の気持ちや考えに先回りして応えていたり、余計な不安を煽っていた事が多かったことに気づいた。この研修を通して、心で受け止める聴くことの難しさに改めて考えさせられた。また、この研修では、5分間の中でのやり取りをテープに録音して、後で振り返るのだが、たとえ5分間という短い時間でも相手の話を真剣に聴く姿勢があれば、話し手の信頼を十分に得ることができることを学んだ。

ロールプレイやサイコドラマでは、相手の立場や気持ちになって考えたり、感じたりすることの必要性を学ぶことができた。子どもや保護者の立場になって教員の言葉を聞く体験によって、教員の言葉使いの大切さと影響力の大きさを改めて強く感じるようになった。よく教員は子どもに相手の立場になって考えたり、行動したりするように言っているが、学校では実際に子どもが相手の気持ちを理解するための学習は活字によるものが多く、体験する機会は少ない。「いじめ」「不登校」といった教育の今日的課題を解決するには、体験的に友だちの立場になって考えたり、感じたりする体験的学習を多く取り入れていくことが必要であると思った。

グループワークトレーニングでは、ダイナミックに学級集団に働きかけ、心を育てることができる。これは一対一ではなく、小グループや集団を対象とした働きかけ

で、互いの違いを理解し、認め合う体験であり、学級担任にとっては必要な働きかけの方法である。グループワークトレーニングやサイコドラマを通して、子どもが体験学習をする機会を多く取り入れ、互いに違いを認め合える体験の機会を多く取り入れる必要があると思った。

石隈先生（筑波大学心理学系助教授）の援助チーム理論では、学校で求められている「子どもを支えるチーム作り」を学ぶことができた。学校では担任の先生が問題を抱えた子どもに振り回されたり、悩みを抱えたり、保護者への対応に困っていることが多い。このような様々な問題を抱えた子どもを支えるには担任一人ではなく、教職員集団の効果的な働きかけが求められる。この援助チームでは教職員集団の役割、多角的に子どもを理解する方法、子どもの抱える問題への働きかけの仕方などが具体的に考えられている。また、短時間の打ち合わせで効率的に話し合いが進められるような援助シート等の工夫もされている。忙しい学校であるからこそ、この方法を取り入れて効率的な取り組みを行う必要を感じた。

## 3. カウンセリングの実践を通して

総合教育センターの相談センターで不登校のAさんを担当させていただいた。Aさんは中学1年生の夏休み明けから欠席が始まっていた。教師への不信や父親への反発も見られ、相談センターに入室してくれること自体が難しいと思われた。また、学習面での力は持っているが、学校内での友人関係はうまくいっていなかった。相談センターでの子どもとの相談はプレイセラピーが中心である。プレイルームにはたくさんの玩具や簡単な運動用具が備えられている。しかし、中学2年生のAさんがプレイルームでの遊戯に関心を持ってくれるには年齢が高く、不安があった。また個室として用意されている相談室でAさんと話しながら相談を進めるには、Aさんの年齢や不登校という状況から雰囲気作りが難しいと思われた。保護者担当の相談員からその子どもの夢中になっているゲームがあることを知った。そこで自然な形でそのゲームを共有することを考え、試みることにした。事前に相談室に準備したゲームは、Aさんの関心を強く引きつけることができた。Aさんにとってゲームに没頭することが今の自分を支えているかのように、Aさんはゲームを通して私と対面してくれた。私はゲームを通じてAさんとリレーションが生まれることを願って、面接に臨んだ。「Aさんに、私として何ができるのか、このままでよいのか」私には焦りと不安を感じながらの面接であった。しかし、保護者担当の相談員のきめ細かいアドバイスで、何とかAさんとの面接を継続することができた。今までの私は、常に子どもや保護者の気持ちを理解したように振る舞い、先回りした言葉や態度を示していたように思

う。私はAさんとのふれあいを通して、その人自身の力を信じることに、決して先回りしない姿勢の大切さを学んだ。そして、大変難しいことではあるが、あるがままの子どもを受け入れようとする姿勢が、子どもとの信頼関係を築き、ふれあいを育む出発点であることを実感した。

#### 4. ふれあいをすすめる教育相談

情報化社会が急速に進展し、子どもの生活が変化する中で、希薄になりつつあるのが「人と人とのふれあい」である。「いじめ」や「不登校」といった問題の根底にも互いを理解しあえない希薄な子ども同志の人間関係があるし、対教師暴力や器物損壊といった問題行動にも学校不信や教員不信が根底にある。また、最近多くの子どもたちに「きれる」という現象が起きている。これは自分の感情を素直に表現できず、心に閉じこめていた感情や思いが爆発するのだと思う。人は誰でも「愛されたい」「好かれたい」「認められたい」「嫌われたくない」という感情を持っている。この感情を素直に表現する方法も、「人と人とのふれあい」を通して学ぶことができる。私は今回のカウンセラー研修を通じて、子どもたちが、教員や友達、地域の人たちと「ふれあうこと」の大切さを学んだ。

学校でのふれあい（人間関係づくり）をすすめる取組には様々な方法や場面が考えられる。例えば家庭訪問の時、私は子どもたちに次の家の案内役や家庭訪問の順番を決めてもらっている。各家庭の様子を知ることも大切なことだが、子どもの案内で歩いている時に交わす会話は、学校生活での授業や部活動では見られない表情で自然に話が弾むことが多い。また、朝の学級指導の時間も同様である。15分前に教室に居られれば、教室に入ってきた子ども一人ひとりと話ができるし、子どもの小さな変化にも気づくことができる。他にも昼食指導の時間や清掃活動の時間も有効に利用できる。このように学校生活のいろいろな活動を見てみると、多くの場面で子どもたちとふれあう機会がある。大切なことは、私たち教員が意識して子どもたちとふれあう機会を生かすことだと思う。さらに、ふれあいの取組を学校全体の行事へ発展させることも重要だと思う。体育祭や合唱コンクールなどの行事でも、子どもたちの取組姿勢や励まし合いを大切に、互いの意見や気持ちをわかちあう時間を取り入れることが必要だと思う。そして、学校行事を通して、子どもたち同志の人間関係作りが発展し、向上することが期待できる。また、ふれあい活動は学校だけでなく、保護者や地域の人たちと共に取り組むものに発展させる必要がある。川崎市内の多くの学校で行われている「一声運動」や「あいさつ運動」は、このふれあい活動を具

体化した取組である。様々なふれあい活動から、子どもたちが日常的に人とふれあい、自分以外の人との関係性を考え、「自分が掛け替えのない存在である」という気持ちで自分を見つめることができるようになる時、「非行」「いじめ」「不登校」といった教育の今日的課題の多くが改善の方向にすすみ、子どもたちの生きる力を育むことにつながっていくと思う。

#### 5. 今後の課題

教育相談という言葉は以前から知っており、何回かの研修も受けたことがあった。しかし、それらの研修の多くは、その場で理解したつもりでも、実際にはなかなか生かすことができないものが多くあった。なぜなのか、それは教育相談を本当の意味で理解し、身につけていなかったからである。教育相談を、悩みをもった子どもや保護者との相談といった狭義の意味でとらえていたのかも知れない。教育相談における様々な手法は、私たちに人間関係作りには欠かせない多くの視点と技法を教えてくれる。

今後は教育活動のあらゆる場面で、子どもたちのふれあい（人間関係づくり）活動を積極的に取り入れる姿勢を大切にしていきたい。そして、学校での学習環境を一人ひとりの子どもの必要に応じて温かく、援助的で、良好な人間関係ができるように整えることこそ、私の重要な教育課題だと思う。

#### おわりに

カウンセラー研修員として、一年間研修させていただき、多くのことを学ばせていただきました。今後は自分の力量にあった教育相談を積極的に教育活動に生かして生きたいと思えます。最後になりましたが、研修の機会を与えていただいたこと、宮崎中学校の校長先生をはじめとして、多くの方の配慮に感謝すると共に、ご指導いただきました室長、指導主事、相談員の皆様に心からお礼を申し上げます。

#### ・参考文献

- 国分康孝 『育てるカウンセリングが学級を変える』  
図書文化 1998年刊行
- 柳井 修 『生徒指導の心理と方法』 ナカニシヤ出版  
1995年刊行
- 高野清純 『プレイセラピー』  
日本文化科学社 1988年刊行

#### ・指導助言者

川崎市総合教育センター研修指導主事 鈴木 真一